



2012年8月15日発行（隔月刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2012年8月  
第93号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 目 次

漢点字の散歩 (31) (岡田健嗣) .....	1
点字から識字までの距離 (89) (山内 薫) .....	8
日中の戦略的關係をどう構築してゆくか (村田忠禧) ....	11
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子) .....	17
東京漢点字学習会報告 (菅野良之) .....	23
漢文のページ .....	27
追悼 - 河村幸男様 (岡田健嗣) .....	29
ご報告とご案内 .....	30
編集後記 (木下和久) .....	31

# 漢点字の散歩(三十一)

岡田 健嗣



## 二つろの間口

昨年三月十一日の、東北・関東地方の東海岸を襲った大地震と、それに伴って発生した大津波による大災害から、一年と半年を経ようとしています。直後私も「未曾有」という言葉を使ったことを記憶しています。その大きさを測りきれないと言う意味です。勿論現在も変わりはありません。

しかし私たちには、ご家族を失い、住居を奪われ、職場も潰えた被災者の皆様とは異なって、案外早い時期に、日常が戻ってきました。

三・一一の後まるまる一週間は、テレビ報道は震災関連で埋められました。また鉄道を中心とする首都圏の交通は、取りあえずの復興までに数週間を要しました。とりわけ最初の一週間は、帰宅難民とか交通難民とか呼ばれて、多くの皆さんが移動を妨げられて、誠に長く感じられたものでした。しかしその後は、急速に日常が回復して、三・一一は、早々と過去の体験として振り返る対象と化して行きました。

私「未曾有」というときに抱く茫とした落ち着きの悪さは、恐らくこのような情況に抗し難く、あの被災の共有に失敗してしまったと感じるからではなからうか、そう思えてなりません。

あの震災の後総合雑誌『文藝春秋』は、作家の故・吉村昭氏が調査しまとめ上げた関東大震災、そして明治初期から昭和三十年代にかけて東北地方を襲った大津波の記録を再録しています。

一九二三(大正十二)年九月一日午前十一時五十八分、マグニチュード七・九、震度六という大地震が、関東地方を襲いました。氏はその震災の特徴について、次のように括っておられます。

・関東大震災の災害は、揺れによる建物や道路の倒壊よりも、伴っておきた火災によるものが甚大であった。

・その火災は通常言われているように、昼食の調理に使われていた火が、地震によって延焼したものばかりでなく、大学の研究室や化学工場で使用し保管されている化学物質の容器が、損壊して発火したものも少なくなかった。

・家財道具を背負うなどした避難民の荷物が火を呼んで、犠牲者を倍増させた。

……

最後の、荷物を持って逃げるのが被害を拡大させたということは、先人の知恵を忘れてしまっていた結果だとも述べておられます。それは、有効な消火法のなかった江戸時代、大火が頻発していたころ、火災時に、荷物を車に載せたり背負うなどして運ぶことを厳禁していたこと、それは延焼を防ぐとともに、避難路を確保すること、そして何といっても消火作業（建物を破壊して、可燃物をなくすることで延焼をくい止める消火法）を妨げないためであると言います。江戸幕府は、荷物を持って避難することを、罪として罰したのです。

氏は、もしこれが守られていたら、関東大震災の人的被害は、ずっと小さなものになっていたのであろう、氏自身、戦時中空襲に見舞われた際、荷物を捨てたことで一命を取り留めた経験があるとも述懐しておられます。

震災直後の被害の調査と分析は、精力的に、詳細になされました。災害に強い都市計画、災害時の被害の予想、被害を最小限に留めるための方法と試作、これらが生かされることが望まれるのだが、しかし一九九五の神戸の大地震の後テレビ番組に出演したとき、関東大震災に関する資料について役所にただしたところ、その存在さえ知らなかったと、強く憤っておられ

ました。

もう一つ、明治から昭和三十年代にかけて東北地方を襲った津波の記録は、私たちに覚醒を求めるものに違いありません。三・一一の後繰り返し報道された津波の映像、その被害の有様は、その記録にそのまま映し出されていたのです。つまり私たちは、既に津波というものがどういうものか、どんな被害をもたらすものか、情報としては充分持っていたのです。しかも人びとの取る行動、避難に至るまでのプロセスも、ほぼ繰り返しなぞっていたのです。そうであればなおさら、人の心、人の記憶とは、如何に当てにならないものかということをもっとその身に、当てにならないその心に刻みつけなければいけないと、思わぬわけにゆきません。三・一一に起きたことは、明治三十年代、昭和の初期、昭和三十年代に、既に充分過ぎるほどに繰り返し返されていて、しかもその都度同様の被害と悔恨を残したのでした。そして現在、早くも一年半前の記憶は、直接の被災者ではない私たちのなかで、変容しつつあると思えてなりません。

吉村氏はもう一つ、極めて重要と思われることを述べておられます。

関東大震災の直後、世界の他の地域では見られない、被災者の落ち着きと労り合いの姿が、至る所で見

られたということです。被災者同士が安否を確認し、情報を交換し、物資を分け合う姿が、至る所で当然として繰り広げられたのでした。これは特筆されるべきことで、世界の他の地域が同様の災害に見舞われると、人びとは例外なく動揺し泣き叫び、自らの不運を訴えると言います。また当然のように、強盗や略奪が発生し横行すると言います。ところがわが国では、人びとは勞り合い秩序が保たれ、整然と復興へと向かったと述べておられます。勿論例外はありました。不幸な事件もありましたし、震災を隠れ蓑にした暴力も行使されました。それでも一般の民衆は、整然と避難し、暴力に手を染めることはなかったと言います。

氏は震災の記録とは別にもう一つ、興味深いエピソードを記しておられます。旧海軍の潜水艦の事故に際して乗組員の取った態度が、一般の潜水艦事故とは全く違っていたと言うのです。事故後に引き上げられた潜水艦を調べてみると、一般（他の国々の海軍）の潜水艦の事故では、海面への浮上の可能性が閉ざされたことを知った乗組員は、出口のハッチへ殺到して、われ勝ちに艦の外へ脱出しようとした跡が残っていると云います。ハッチは元より強い水圧で開きません。たとい開けることができたとしても、流入する海水の力に押されて、脱出できることはないと考えられます。それでもそのような行動の跡が見られたと言います。

ところがわが国の潜水艦事故では、浮上の可能性のないことを知った乗組員は、それぞれの寝台に横になり、徐々に酸素が欠乏し死が訪れるのを静かに待っていたらしいのです。これは関東大震災直後の被災者の行動に、どこか通じるものがあると思われてならない、と氏は言われます。

絶望的な状況への対応のこのような相違は、何に由来するのか、大変興味深いものがある、これが日本人の特質であるとするなら、これは優れた点と言つてよいのではないかと述べておられます。

本会の活動の一つに、新聞の健康記事を漢点字訳して、読者に届けるというものがあります。これは朝日新聞と読売新聞の記事の中から、比較的短い記事を選んで作っています。

三・一一直後、朝日新聞は通常の記事を中断して、震災関連の記事に差し替えられました。読売新聞では、健康記事の体裁を残しながら、被災地へ取材に赴いて、医療の現状と問題を伝えていました。従つて本会では、朝日新聞の記事は暫く休み、読売新聞の記事の漢点字訳に力を注ぐことにしました。その記事を通して私は、強く感銘を受けたことがあります。

それと言うのも、通常漢点字訳している記事の体裁は、おおよそのレイアウトが予め決められていて、始まりがこうなら次はこう、その後展開があつて最後に

結びがあると、折り詰め弁当の詰め合わせのごとく、読み進んでいるうちにも次に何が書かれているか予想がつくように構成されています。読み易さ、理解し易さの点からみれば、誠に当を得た構成と言えるのかもれません。それだけに黒白のはっきりした、ステレオタイプな構成になり勝ちなことも、免れ難いものがあります。

ところが当時の記事は、誠に余談を許さない、読者の予想を裏切りつつ興味を引きつける、大いに力の籠もったものに仕上がっていたのでした。記事は三月の末から四月、五月と同様の企画で進められました。恐らく記者の皆様が、その評価の基準や分析の方法を持ち得ないまま災害の現場に向かわれて、手探り足探りの中から情報を得て、ひとつひとつ積み重ね整理しながらの記述が、あの臨場感に満ちた記事になったものと思われます。

しかし私たち非被災者が日常を取り戻すのと歩を同じくするように、被災地からの報道も、徐々に元の起承転結のはっきりした、分かり易い、読み易いものに戻っていったのでした。私のような読者にしてみれば、残念な気分は否めません。当時の隅々まで目が行き届かずとも、切り口の鮮明な、好奇心に溢れた記事に触れて、読者である私も、心の結ばれが解けるような気持ちになったものでした。

最後に、ささやかな私の体験について、一言させていただきます。

（これから先は、多少物欲しげに読める箇所もあります。ご容赦下さい。）

私は視覚障害者ですが、若い頃は白杖一本を頼りに、何処へでも一人で出かけたものでした。全盲の者が一人で外出するということは何と危険と思われるのか、案外本人には分からないものです。警察官や役所の方から、「一人で歩くのは危険ですよ、どなたかご家族はおられないのですか？」などと声をかけられます。これは珍しくありません。本人にしてみれば、一人で歩くということは危険と引き替えに、自由を得ることを意味します。一人で歩くということ、自由を得るということが、何より掛け替えのないものになつて参ります。そんな折り、どなたか付き添いは？と言われるのは…。考えてみて下さい。外出の必要を感じる度に、家族や友人の手を煩わせること（このプロセスは省略します）、このことを誤解を恐れずに言うならば、くびきに繋がれているのと同じ状態にあるとさえ言えます。

そこで一人での外出を決行します。決死の覚悟とまで言わずとも、かなり「よし！」という、気合いをかけて臨んでいるに違いありません。とはいえ毎日のことですから、毎日気合いをかけることはできません。

気合いをかけている状態が常態になってくる、というのが当たっているのではないでしょうか。そのようにして私は、行動の自由を得てきた、と取りあえず申しとおきます。

七年前より私は、視覚障害者の外出支援事業に手を染めることになりました。この事業は、公費によってガイドヘルパーを、障害者に派遣するというものです。私個人にとつてこのような事業に関わるには、幾らかの経緯がありました。何と言つても歳には勝てない、一人歩きが辛くなつてきたということが最も大きな理由です。それに加えて、怪我のできない身体になつてしまったということがあります。一人歩きには、怪我がつきものです。当時は生傷が絶えませんでした。

しかし制度上どうしても一人で歩いたり乗り物に乗つたりしなければならぬことがあります。

一人歩きをする視覚障害者には常識になつていますが、一般にはそうは思われていないことがあります。一人で白杖を持って電車に乗ります。都会の電車の座席は、だいたい空いていません。一般には吊革につかまって前の席が空くと、そこに腰を下ろします。立っている人が少なければ、少し離れた席でも、そこへ行って座ります。くだんの視覚障害者と言えば、立っている前の席が空いたときには、何とかそれ

を感知して腰を下ろすことができます。しかし離れた席が空いたときは、感知できません。ターミナル駅などでひとの動きが大きく、どこかに空席ができたらしいと分かつても、その席を探すことはできません。

読者諸兄姉はここで、妙ないぶかりを感じておられると思います。「周囲の乗客は、誰も教えてあげないのかしら」。誠にその通りで、ほとんどの人が、ちよつと教えてあげれば済むことなのに、と思つておられるようですし、誰か席を譲るくらい造作のないことではないか、と思つておられるらしいのです。

正確な数値を出すことはできませんが、このような場合、空席を教えてももらえる機会は、恐らく一〇回に一回もないのではないのでしょうか。席を譲つて下さる（今ではさほどの抵抗はありませんが、若い頃は、実に気恥ずかしいものでした）となると、もつと希なことなのです。従つて私たち視覚障害者は、短時間の乗車の際は、できるだけドアに近いところに位置を占めて、着席は初めから考えないことにしています。少し長く乗るときは、できるだけ座席の前の吊革につかまるとして、ひたすら前の席の空くのを待つのです。

昨年三月十一日、午後二時四十六分、東京・横浜にも希な、震度五という揺れが襲いました。その後一週間は、公共交通機関はほぼ不通の状態が続きました

た。鉄道ではJRの復旧が最も遅く、私鉄各社も取り分け相互乗り入れを中止するなど、人の移動を大きく制限していました。

私はこの間、全く外出しないで、閉じ籠もり状態にありました。テレビ・ニュースで、鉄道の復旧の状態を知るようになって、震災から三週間後に、一人で外出してみました。そこでの体験は、私にとつて忘れられないものになったのでした。

京浜急行線の横浜駅は、通常よりやや混雑していました。プラットホームに降り立ってみると、職員や警備員の方ではない一般の乗客の方が、次々と声をかけてくださって、危険のないよう、障害にならないよう、皆さん気をつけて下さったり、誘導して下さったりしたのでした。次の電車を待つ間周囲に耳を傾けてみますと、人の雰囲気や普段とは全く違っていました。見知らぬ乗客同士が、互いに譲り合い気遣い合っている様子が、混み合ったホームのあちこちから伝わってきたのでした。電車が到着して乗客が乗降する間も、先を争う声も身体の不つきり合う動きも、伝わってきませんでした。

私の降車駅に着いてホームに降りると、やはり横浜駅と同様に、乗客の一人が改札口まで誘導して下さいました。方向が違わらしく、改札を出たところでお別れして少し進むと、いつもの難所に差しかかりま

す。それは大規模なパチンコ屋さんで、その前に自転車が蜘蛛の巣状態に置かれています。普段はぶつかりながら倒しながら、蜘蛛の巣に捕らわれないよう、その外周をゆつくり探りながら進むのですが、その日は駅の中と同様に、「あぶない・あぶない！」と、通行人のお一人が飛んできて下さり、私が乗るバス停まで誘導して下さったのでした。

こう書いてみると日常的にありそうなことと思われるかもしれませんが。しかしそうではありません。当時は、東北地方・関東地方の太平洋沿岸地域を襲った大規模な地震と津波が、見たこともない光景を現出しました。そして首都圏に引き起こした鉄道と道路の麻痺が、人びとの日常を根底から覆されて、ある意味、カオスの真つ直中に投げ込まれていた、そんな状況だったのでしよう。その証に、十日後に同様のコースを一人で歩いてみたところ、以前に戻っていたのでした。混雑しているところでは、私の直前を横切つて、白杖に足を引っかけるとか、点字ブロックの上に立ち止まつて私の歩みを妨げるとか、誠に日常が急速に戻ってきていたのでした。

この一年あまり私は、このような状況をどのような捉えたらよいか、考えてみました。

以前欧米の障害者と社会の様子をうかがう機会があった、たとえばドイツでは、下肢障害の人が道路を横

断しているときデモ隊が通りかかり、その前を横断する形になった場合に、デモ隊は、その場に留まって横断を見届けてから行進を再開するとか、車いす移動中に段差で難儀している人を見かけると、近くににいる人が直ぐに手伝うとか、そういうことが日常の中に浸透していると言います。私自身東京で迷ってしまつて途方に暮れたことがありました。どなたも声をかけて下さらない中に、外国人らしい方が手を貸して下さり、事なきを得たという体験があります。雑踏の中で人とぶつかるケースは珍しいことではありません。そのようなどき「ソーリー」という声をよく聞きますが、日本語の声を聞くことは、むしろ希です。

この稿の初めに、災害時の日本人の振るまいは、世界の多くの人びととは違うという、吉村昭氏の見解をご紹介しました。しかし私は、ここにきてそうとばかりは言えまいと考えるようになっていきます。わが国の災害時には、絶望のあまり泣き叫んだり呪詛したり、暴動・略奪に終始することはないようです。他の地域や国々でも、そういうことばかり起きているとも思えません。多少そういうこともあるかもしれませんが、頻度に違いがあるだけではなかるうか、そう考えています。わが国の災害時にも、立派に悪事を働く者はいるので。

ここで私が最も関心を寄せることは、わが国の災害

時にはなぜ労り合い助け合う、互助的な関係ができあがるのか、関係はできあがるのだが、決して組織されるのではない、しかも一過性で、直ぐに次に移行するということです。しかもそのような関係は短期間に終わって、早い時期に日常が復帰する。「一期一会」とは、誠にこのようなものをいうのかと、目から鱗の落ちる思いがしたものでした。精神医学や心理学ではどのように言うのか詳らかにしません。しかし普段からこのような災害時と同様の心の働き、あるいは気持ちの持ち方ができれば、大変生活し易い社会になりそうだが、そう思われてなりません。あの三・一一から三週間後の私の体験は、私ばかりでなく多くの人びとに、心地よい何かを残したに違いありません。

私は取りあえずこのような心のあり様を、「こころの間口」と呼ぶことにします。日本人は日常には「こころの間口」を、必要以上に開こうとしない、そのために手を差し伸べなければならぬときに、対応が遅れてしまいます。欧米の人びとは、「こころの間口」を常に広く保とうと努力している。そのために無理なく身体が動く。どうやらそのような図が描けそうです。

私自身、あの災害から学んだことの一つとして、このことを心に刻んで置きたいと思つてるところです。



## 点字から識字までの距離(八九)

野馬追文庫(南相馬への支援)(七)

墨田区立あずま図書館 山内 薫



Kさんから六月に送る本についての打診があった。

「今回、絵本一、読み物一でどうでしょうか？読み物は以前から候補に挙げていて、『三・一後を生きるきみたちへー福島からのメッセージ』(たくきよしみつ著、岩波ジュニア新書)、『僕のお父さんは東電の社員ですー小中学生たちの白熱議論！三・一一と働くことの意味』(毎日小学生新聞編+森達也著、現代書館)、『希望のキャンパーふくしまキッズ夏季林間学校』(田口ランディ著、成清徹也写真、汐文社)、『こども東北学』(山内明美著、イースト・プレス)の四冊から一冊いかがでしょうか？」

そこで、候補の本を入手して読むと共に、福島に住む友人にも意見を求めた。まずは『僕のお父さんは東電の社員です』については、メールで「最終的に容認できる本ではないというのが私の感想です。ゆうだいくんの手紙はそれなりにインパクトがあって、みんなが話し合う素材としては貴重なものだと思います。しかし、この本の編者のそのままにしてきた大人みんなが悪いごめんなさいという論理は、責任の所在を曖昧にするもので、ナチス・ドイツのルドルフ・ヘスまで

持ち出して問題を拡散してしまう大人の側の論理はどうかと思いました。今は一日も早く原子力を使用した発電そのものをやめることが、私たちに課せられた課題だと思っています。処理できない使用済み核燃料を生み出していく原子力発電が安全だという論理は全く理解できません。福島第一原発で今も過酷な労働に従事している多くの人たちのことに思いをはせることや、派遣労働など、人を人として認めないような風潮が今も蔓延していることと今回の事故とその後の対応は通底していると思います。」と記した。

この本に関しては、福島の人々からも「これは、たくさんある本の一冊として図書館で出会えればいい本のように思います。」という感想をもらった。

また、本宮市のYさんから「山内さんの意見に賛成です。読んでいて、子どもの認識の誤りもあり、福島の人間としてちよつと不快になるところもありました。あくまで一人一人の子どもの意見だからとも思いましたが、やはり、今の被災地の方々にはあまり適さないと思います。」という感想をもらった。

Yさんは『こども東北学』について「著者が私より若いのに、『本当にこんな風に育ったの?』と考えるくらいに環境に驚きました。私の母や祖母の世代のことならわかるのですが、同じ東北にながら別の世界のこのようで実感がわきません。一般的な東北学入門ならよいと思いますが、あえてこれを送る必要はな

いのではないかと思えます。」という意見だった。この本については福島の人からも「『こども東北学』をじっくり読みました。中央と地方、東北コンプレックスについて書かれたところが印象的でした。そういうえば、私を含め、東北の人たちは関西の人たちのように東北の言葉を東京では使わない人が多いのではないかと思います。共通語を使おうとします。だから『東北弁』ではなく『東北]なまり』といわれるのかもしれない。でも、今の子どもたちはどうでしょう? 『こども東北学』にうなずきながら読むのは、私たち世代かもしれないと思いました。うまく言えませんが、福島で震災を経験し、震災後も福島で過ごし、生活してきた人同士にしか許容できないことがあります。『こども東北学』も、手渡してくれる人を選ぶ本かもしれない。難しいです。」という感想を頂いた。

なかなか入手できなかった『希望のキャンペーンふくしまキッズ夏季林間学校』について、Yさんは「昨年、福島にいるほとんどの子ども達がこのような体験をしたでしょう。今年もこんなことになるのか? という思いがよぎりました。子ども達が『こんなことがあったな』と眺めるには良いかもしれませんが、万人向けではないのではありません。』という事で、この本もあえて仮設住宅に送る本からは外しても良いのではと言うことになった。

そして『三・一一後を生きるきみたちへー福島から

のメッセージ』も入手に時間がかかった本だったが、読んでみた感想は「つらい読書でした。福島で起きている事を忠実にレポートしていると思いました。」福島の人たちも「読んでいて、震災後、福島で人々の間でおこったことをトレースしているような感じがしました。著者の思想的なこととはともかくとして、福島の人たちの、負の部分が書き残されたと思いました。」と述べているように、今まで原発をめぐって福島でどのようなことが起こったのか。さらに原発事故後に福島でどんなことが起きたのか、ということが詳しく書かれており、私は正直読むのが辛かった。この本にはネット上で、かなり説得力のある批判もあり ([http://navao2.at.webry.info/201204/article\\_3.html](http://navao2.at.webry.info/201204/article_3.html)) やは

ないという結論となった。「結局、福島においても、あるいは私たちも含めて原発の問題に関しては様々な考え方や意見などがあり、それをまとめる事は不可能だ」という事がより鮮明に分かったというのが、正直なところ。そうした意味で、南相馬市の仮設住宅に原発関連の本で何を送るかという事は、先の東電の本も含めてとても難しい事だと思いました。」というのが最終的な感想と言うことになってしまった。こんな経緯で六月には前回記したように『おじさんのかさ』と『シャーロットのおくりもの』を送ることになった。

ところで、南相馬のRさんから下記のようなメール

がKさんに届いた。

「K先生にお願いですが：・新年度になり、各仮設の自治会長さんが交代になったところや、新規に自治会が設立されたところもあり、(あしたの本)野馬追文庫の趣旨が薄れつつあるところがあります。ぜひ、K先生からのメッセージをメールでいただき、それを各自治会長さんにお届けしたいと思えますがいかがでしょうか?お忙しいところ申し訳ございませんが、よろしくお願いいたします。南相馬市社協 R」

そこでKさんが文案を作成し、私がいくつか追加・修正して下記のような文書を仮設住宅の自治会長宛に送ることになった。

「南相馬市 仮設住宅 自治会長各位

南相馬市災害復興ボランティアセンター、生活支援相談室のスタッフの皆様の助力に助けられながら、昨年八月から、毎月十一日に、南相馬市の仮設住宅に子どもの本を送らせていただいています。

「子どもたちへ(あしたの本)プロジェクト」(呼びかけ四団体は以下の通り)

社団法人日本国際児童図書評議会 (JIBV)、社団法人日本ペンクラブ (P.E.N.)、財団法人日本出版クラブ (JPC)、財団法人出版文化産業振興財団 (JPIIC)の行っているプロジェクトのひとつです。本年六月から、「野馬追文庫」としてシンボルマークも作りまし

た。今年の相馬野馬追は、馬たちも戻ってにぎやかなことでしょう。

毎月二冊ずつぐらいですが、仮設住宅の集会所に子どもの本を「毎月」送らせてください。送る本は、南相馬の「今」を私たちなりに一生懸命見つめ考えながら、仮設住宅で暮らす子どもたちに今どの本を届けたらよいかと、悩みながら選んでいます。

南相馬の皆様の抱えている状況は、日本全体の、私たちの問題です。私たちは忘れてはいけない、忘れるはずはないのに、絶対に忘れてはいけないのに、皆さんにとつてはまだ何も解決してないのに、ともすると人間は福島で起きたことを忘れてしまいがちになります。忘れずに欠かさず毎月本を送るといことは、私たち自身への楔です。

私たちは、本の力を信じて仕事をしたり活動をしています。自分たちの信じているものに祈りと願いと想いを込めて南相馬の子どもたちに本を送ります。仮設住宅の皆様の近くにそれを置かせてください。何気無く子どもたちが手に取ってくれたなら・・・、お母さんお父さんが、家を持って帰って、子どもたちの読んでくださったなら・・・、おじさん、おばさん、おじいさん、おばあさん・・・皆さんも野馬追文庫の本が目に入ったら、どうぞ手にとってください。優れた子ども本は、大人にも楽しいものです。皆さんで好きに読み

あってください。紙芝居もありますので、サロンなどで上演してみてください。

南相馬市には日本一と言えるようなすばらしい図書館があります。野馬追文庫の本を礎にしてどうぞ豊かな図書館の本も利用して頂けたら幸いです。

お送りする本は、仮設住宅に暮らす皆さんのものです。どんなふうに使っていただいてもかまいません。

震災から一年三か月、皆様の日々の暮らしを取り戻すためのたたかいのご苦労を思うと、深く首を垂れるのみです。その暮らしの中で、毎月どんな本が送られてくるだろうというささやかな楽しみをお持ち頂けるなら幸いです。ご要望などありましたら是非声をお聞かせ下さい。

南相馬の子どもたち、未来ある子どもたちが人を信じ、元気に育ってほしいと願わずにはおられません。どうぞ、今後ともよろしく願います。野馬追文庫 山内薫・K

なお七月には『一休さん』（宮尾しげを著、新・講談社の絵本）と『きゅうりさんあぶないよ』（スズキコージ著、福音館書店）の二冊、八月には『じごくのそうべい』（田島征彦著、童心社）と『おにぎり』（平山英三文、平山和子絵、福音館書店）の二冊を送った。

## 日中の戦略的關係をどう構築してゆくか

― 尖閣・釣魚島問題を考える視点

― 村田 忠禧（むらたただよし）

横浜国立大学名誉教授・村田忠禧先生からいただいた原稿を、前号に引き続き、掲載させていただきました。この四月二十六日に行われました、工学院大学でのご講演のレジュメです。現在の国際關係の課題である「尖閣諸島」についてのお話です。私たちはこのような課題に、ナシヨナリズムを克服しつつ対処するという、困難なアプローチが求められていることを、歴史から学びました。（岡田）

石原慎太郎東京都知事が4月16日にワシントンで、尖閣諸島を都が購入しようとしている、と発言したことから、政府・マスコミには賛否両論、さまざまな反応が見られる。しかしいずれにも共通しているのは「尖閣諸島は歴史的にも国際法的にも日本の固有の領土」、「中国（台湾も含む）」との間には領土問題は存在しない」という立場である。

はたしてその通りなのだろうか。それでは中国は何を根拠に中国の領土だと主張しているのだろうか。争いごとが発生した場合には必ず双方の意見を聞き、事実を即しているか、道理にかなっているか、公平・公正に判断することが求められる。領土問題はとりわけナショナリズムを煽る手段として利用されやすいので、なおさら冷静かつ客観的な対応が必要なことは言うまでもない。

### 琉球国には「尖閣」は含まれていない

「魚釣(うおつり)島」という名称は中国の「釣魚島」を日本語風に言い換えたもの。「尖閣諸島」というのもイギリス海軍が付けた「Pinnacle Islands」を翻訳したもの。いずれも琉球古来の呼称ではなく、外来の翻訳語である。それだけ琉球には縁遠い存在なのである。なぜならこれらの島々と南西諸島との間には沖縄トラフ (Trough 舟状海盆) という、ところによっては2000mを越す深い海が存在し、琉球の漁民は容易に行くことができなかった。しかし200m未満の大陸棚の縁に位置しているので、福建や台湾の漁民たちにとっては身近な存在であったし、今でもそうである。かつて福建省福州から冊封使を乗せた船が琉球の那覇に向かうにはこれらの島々を目標にして大陸棚の浅い海が続く西側を北東方向に進み、最後に黒潮の

流れる深い海を渡った。それは危険を伴った。黒水溝を無事に渡り切り久米島が見えて来ると、福州から冊封船に伴航してきた琉球船の船員たちは、無事に故郷に帰れる喜びを歌と踊りで表現した。

琉球国は三省三十六島からなるとされていた。仙台藩の林子平の『三国通覧図説』の「琉球三省並三十六島之図」は中国、琉球、日本を色分けしているが、釣魚台、黄尾嶼、赤尾嶼は中国の色で描かれている。江戸幕府は「国絵図」という共通した尺度による地図を全国に作らせたが、琉球国を支配した薩摩藩も正保、元禄、天保と三回にわたって琉球国絵図を作って幕府に提出している。林子平のは民間人の地図だが、国絵図はいわば公式地図。われわれは国立公文書館のデジタルアーカイブに公開されている画像ファイルで見ることができ、江戸時代の日本の測量技術の高さに驚くとともに、琉球国の範囲を明確に知ることができ、そこには「尖閣諸島」が含まれていないことに気づく。倭寇討伐や切支丹禁制が敷かれていた時代、国境意識が曖昧であったわけがない。琉球国の西端は久米島、というのは当時の中国、琉球、薩摩の共通の認識であった。中国の施永図が編纂した『武備秘書』巻二「福建防海図」(一六二一年〜一六二八年)には「釣魚山」「黄毛山」「赤嶼」が防衛すべき島嶼として記載されている。

## 日本は戦勝に乗じてこっそりと手に入れた

明治維新によりアジアで最初に近代国家の道を歩み出した日本は一八七九年の「琉球処分」で琉球国を沖縄県として併合した。日ごとに弱体化する清国の実情を知るに及び、さらに触手を朝鮮や台湾へと伸ばしていった。動力船による航海が可能となり、釣魚島などの島を開拓しようとする人々も現れてきた。明治政府は沖縄県令(のちの知事)に福州との間に散在する無人島の調査を命ずるが、県令の西村捨三は『中山伝信録』という文献に記載されている釣魚台、黄尾嶼、赤尾嶼と思われるので、清国を刺激することになりはしないか、との懸念を表明した。外務卿(のちの外務大臣)も、日本の行動に警告を発する上海『申報』の記事を紹介し、「不要なコンプリケーション(紛糾)を避け」、とりあえずは調査のみに留めるべき、との意見を提出した。内務卿も最終的にそれに同意し、国標建設の儀は「目下見合わせる」こととした。一八八五年のことである。その後も沖縄県から明治政府にたいし国標建設の上申が何度か出されるが、政府は取り上げなかった。ところが日清戦争での日本の勝利が確実になった一八九四年十二月になると、もはや清国政府を恐れる必要はない。「其の当時(一八八五年)と今日とは事情も相異候に付き」として内務大臣は標杭建設

を外務大臣に提起し、外務大臣も「別段意義なし」と回答し、翌九五年一月に標杭建設の閣議決定を行なった。つまり戦争での勝利に乗じて日本の版図に組み入れたのであり、まさに火事場泥棒である。しかし標杭建設はすぐには行なわれず、周辺海域での石油資源の可能性が指摘された一九六九年五月に始めて琉球政府が行なった(これらの経緯については井上清『尖閣』列島―釣魚諸島の史的解明)が詳細に分析している)。

## ポツダム宣言受諾の持つ重み

一八九五年四月の下関での日清講和条約締結で、台湾全島及びその附属島嶼、澎湖列島は永遠に日本に「割与」され、台湾は日本国の一部分になった。釣魚島等はこの条約締結前にこっそりと沖縄県八重山郡に編入されていたので、講和条約締結時には取り上げられていない。かねてから魚釣島等の開拓を求めていた民間人(古賀辰四郎)は同島で羽毛の採取やカツオ節工場などの事業を始めることになった。明治三〇年勅令一六九号(一八九六年五月三〇日)の「煙草専売法施行除外地」には沖縄県管下の島として久場島、魚釣島が記されている。中華民国政府駐長崎総領事も民国九年(一九二〇年)五月二〇日に、福建省惠安県の漁民三十一名が尖閣列島で遭難した時に沖縄県石垣島の人々に救助されたことへの感謝状を出すとともに、日

本政府側から請求のあった救護経費を支払っている（山本皓一『日本人が行けない「日本領土」』）。明らかに当時、中華民国政府は尖閣列島を沖縄県に属するものと見なしていた。

問題は日本が「支那事変」と称して中国への全面的な侵略戦争を行い、さらにはアメリカ等連合国をも敵にした第二次世界大戦に突入し、最終的には日本軍国主義の敗北で幕を閉じたことから始まる。日本が一九四五年八月に「ポツダム宣言」受諾を連合国側に表明し、戦争は終結した。「ポツダム宣言」第八項には「カイロ宣言の条項は履行されるべき」とある。「カイロ宣言」（一九四三年十一月）には「満洲、台湾及澎湖島の如き日本国が清国人より盗取したる一切の地域を中華民國に返還すること」とある。日清戦争で敗北した中国（清国）は、講和条約にもとづき台湾を日本に永久的に割譲したが、日本がポツダム宣言を受諾したことによって台湾は中国に返還された。この点については日本政府も一九七二年の日中共同声明においても「ポツダム宣言第八項に基づく立場を堅持すること」を明確に表明している。

では「清国人より盗取したる一切の地域」の中に釣魚島等の島嶼が含まれるのだろうか。清国との戦争での勝利が明確になり「其の当時と今日とは事情も相異

候に付き」という判断理由で国標建設を決定したのだから、まさに「清国人より盗取した」ものであることが確認できよう。したがってポツダム宣言受諾をもって釣魚島等の島嶼は中国に返還するべきであった。しかし一八九五年一月の沖縄県への編入は閣議決定のみでひっそりとなされ、しかも開拓を申し出る民間人間もなく貸与され、後に払い下げられたため、中国、日本双方ともこの島々を、台湾と同様に中国に返還すべきもの、という認識にいたらなかった。

#### アメリカの琉球支配下で

ポツダム宣言第八項はさらに「日本国の主権は本州、北海道、九州及四国竝に吾等の決定する諸小島に局限せらるべし」と規定しており、沖縄はアメリカ軍の支配下に置かれた。尖閣諸島はもともと沖縄県八重山郡に組み入れられていたので、アメリカもそれを引き継いだ。千島列島はソ連の支配下に置かれた。日本との戦争に勝利した中国では、国民党と共産党との内戦が始まり、敗れた国民党政権は台湾に逃げ延び、中国大陸には共産党の指導する中華人民共和国が誕生した。アメリカとソ連との冷戦対立が激化し、日本は一九五二年四月のサンフランシスコ講和条約発効により主権国家として再出発するが、ソ連、中華人民共和国

を相手としない、アメリカの世界戦略に縛りつけられた偏った「独立」にすぎなかった。

『人民日報』一九五三年一月八日の「琉球群島人民のアメリカの占領に反対する闘争」という資料記事には「琉球群島はわが国台湾の東北と日本の九州の西南の海上に散布し、そこには尖閣諸島、先島諸島、大東諸島、沖繩諸島、トカラ諸島、大隅諸島という七組の島嶼が含まれる」という記述があり、尖閣諸島は沖繩に属するものと見なしていた。したがって米軍が赤尾嶼、黄尾嶼を射爆演習場として使ってきたことに抗議したこともない。

エカフエ（E C A F E 国連アジア極東経済委員会）が一九六八年に周辺海域に膨大な石油資源が埋蔵されている可能性があるとの調査結果を発表してから、尖閣諸島・釣魚島の存在が急にクローズアップされ、日本も中国（台湾も含む）も領有権を主張するようになった。

### 日本と中国との最も重要な課題

おりしもアメリカはベトナムへの侵略戦争の泥沼にはまっており、ソ連との覇権争いを建て直すためにも中華人民共和国との関係改善を模索していた。キッシンジャー大統領特別補佐官が密かに北京を訪れたこと

が明らかになるや、国連における中国代表権問題は一挙に決着がつき、中華人民共和国が代表権を獲得した。日本国内には中華人民共和国との国交樹立を求め国民運動が澎湃として巻き起こった。沖繩の本土復帰の次は日中国交回復が日本の最重要政治課題である。田中角栄は総理に就任するや、公明党の竹入義勝委員長に北京入りをしてもらい、周恩来総理との会談が実現した。一九七二年七月二十八日の二回目の会談で、周恩来は竹入に次のように語った。（竹入メモによる）。

「尖閣列島の問題にもふれる必要はありません。竹入先生も関心が無かったです。私も無かったが、石油の問題で歴史学者が問題にし、日本でも井上清さんが熱心です。この問題は重く見る必要はありません。平和五原則に則って国交回復することに比べると問題になりません」。

この周恩来の発言のなかで注目すべきは、尖閣・釣魚島の問題についてこれまで「関心がなかった」ことを率直に語っていることである。相手への信頼がなければ言えない。すでにこの時点で公明党を含む日本の議会政党は押し並べて尖閣諸島は日本の領土、という立場を表明していたし、中国政府は中国の領土と表明していた。しかし領土の争いで国交回復の実現を遅ら



せてはならない、という点で双方は一致しており、そのために何をなすべきかを真剣に話し合おうという精神に溢れている。そこには打算や駆け引きの余地はない。もう一点、注目すべきは歴史学者・井上清の名前をあえてあげていることである。はたして竹入義勝はその後、井上清の著書を読んだのだろうか。

領土をめぐる主張の違いは日中国交正常化を実現する障害にはならなかった。その後、平和友好条約締結交渉においても鄧小平が領有権問題の棚上げを主張したことは周知の通りである。

「尖閣列島をわれわれは釣魚島と呼ぶ。呼び名からして違う。確かにこの問題については双方に食い違いがある。国交正常化のさい、双方はこれに触れないと約束した。今回、平和友好条約交渉のさいも同じくこの問題に触れないことで一致した。

中国人の知恵からして、こういう方法しか考えられない。というのは、この問題に触れると、はっきりいえない。確かに、一部の人はこういう問題を借りて中日関係に水をさしたがつている。だから両国交渉のさいは、この問題を避けるのがいいと思う。こういう問題は一時タナ上げしても構わないと思う。十年タナ上げしても構わない。

われわれの世代の人間は知恵が足りない。われわれ

のこの話し合いはまとまらないが、次の世代はわれわれよりもっと知恵がある。その時はみんなが受け入れられるいい解決方法を見いだせるだろう」。

鄧小平が一九七八年に期待を込めて語ったように、われわれ二十一世紀に生きる人間は彼らよりもっと知恵をもち、よい解決方法を見いだそうと努力しているのだろうか。

### 事実の共有化から始めよう

これまで私が紹介した事実からだけでも、日本にして、中国にして、政府・政党の見解は自国に都合のよいことだけを取り上げ、不利・不都合な点は触れないで隠していることが分かるであろう。これではお互いに相手への不信任を増大させ、摩擦・対立を激化させるのみならず、自国の進むべき道を誤らせることになる。狭隘なナショナリズムを煽る動きにたいしては冷静な対処が必要であり、客観的、科学的、総合的な視点が必要である。見解の対立する相手の意見・主張にも耳を傾け、冷静かつ平和的に問題を解決しようとする精神は常に求められる。

それを実現するためにはまず事実の共有化が必要である。自国にとって有利であるか否かという目先の利害に囚われてはいけない。あくまでも事実であるのな

ら、しつかり受けとめ、それまでの自分の判断基準を再検証し、誤っていたり認識不足の点があることが分かっただら修正すればよい。国家の枠に囚われず、あくまでも真実、真理を探究する科学的精神をわれわれは持つべきである。

それを実現するためには日本と中国の歴史学者が中心になって、この問題に関する歴史事実の共有化の作業を行なうことを提唱したい。さらには共有化された資料を双方の言語に翻訳し、書籍やウェブデータとして広く世界に公開することが必要である。できれば英文化の作業も行なうことが望まれる。事実の共有化が進めば、認識の共有化に向かって前進することが可能となる。地道で時間のかかる作業になるが、このような積み重ねをするなかで、お互いの知識は増大し、問題を平和的、友好的に解決するための知恵が生まれて来るであろう。また翻訳作業のなかで真に相互理解のために奮闘する人材が育っていくことにもなる。いろいろな意味で日本と中国との明るい未来を開拓することになると思われる。

2012年4月26日

工学院大学孔子学院での報告原稿

## 「東京漢点字羽化の会」

### 例会報告と、わたくしごと

木村 多恵子



第79回例会 2012年6月6日(水) 13:30~15:30

場所 港区ヒューマンプラザ7階第1会議室

いつものように朝日の「季をひろう」のグループを、6月の9日、16日、23日、30日、7月7日の組み合わせを決めた。

「季をひろう」の今月の点字印刷はお休みの月です。古語辞典の難関文字の読み取り辛い、難しいもの、読み誤りやすい文字を再確認した。

「日本人脈記」が、朝日新聞の夕刊の、月曜く金曜(夕刊の無い地域は火曜く土曜の朝刊)に連載されている。その記事の中で、5月22日から、「日本語の海へ」というシリーズが始まっているので、これを「季をひろう」を入力する要領で、「古語辞典」のグループのままで入力、校正することにした。

6月20日に「羽化92号」を皆様にお送りした。前回の91号は「機関誌「うか」発刊15周年記念号」であったので、今回の92号は100号記念に向けて、更に岡田

さんをはじめ、スタッフのご努力で増刊をまっしぐらに進んでゆかれると思う。横浜の皆様何時もありがとうございます。ごさいます。

第80回例会 2012年7月11日(水)13:30~15:30

場所、港区ヒューマンプラザ7階第1会議室

今日は、ご事情により、岡田さんは例会をお休みなされた。

いつものように、7月14日、21日、28日、8月4日の「季をひろう」の担当グループを決めた。

7月18日にIさんが、6月と7月の「季をひろう」の点字印刷をするために、横浜へ行ってくださることになった。Iさん、何時もありがとうございます。

「季をひろう」の6月16日の新聞原稿に誤植があることを、岡田さんから、指摘していただいていたので、それを丹念に、あずま図書館の山内さんのお力をいただいで、皆で改めて正確なものを確認し、書き改めた。

「人脈記」の中のシリーズ『日本語の海へ』を、「季をひろう」に倣って、第一段階のテストケースとして入力はどうするか話し合った。これは、16回ある。もちろん岡田さんのチェックを受けてから正式に

入力をはじめることにし、Sさんにまとめていただくことにした。わたしは、個人的に内容を選んで、自分の好みで読む順番を決めやすいように、表紙の次に目次を入れていただきたいとお願いしてしまつた。

\* 予告

- 8月の例会(第81回)2012年8月8日(水)13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
- 8月の学習会(第63回)2012年8月18日(土)18:30~20:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
- 9月の例会(第82回)2012年9月12日(水)13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
- 9月の学習会(第64回)2012年9月22日(土)18:30~20:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
- 10月の例会(第83回)2012年10月10日(水)13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
- 10月の学習会(第65回)2012年10月20日(土)18:30~20:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

## わたくしごと

わたしが初めて点字を教えていただいたのは、6歳のときである。うらかな暖かい日差しがそこそこに満ちあふれる、真昼に近い時間であつた。

何時も和服を召されている、わたしの母のような優しい先生・中村愛先生が、「今日はこれから楽しいこと、皆さんにとつて大切なことを覚えましょうね。」と言われた。

皆さんといつても3、4人の6、7歳の生徒である。

「自分の右の手を前に出してごらん下さい。右の手はどっちかわかりますね」

優しい先生の声の中に、いつになく張り詰めたものを感じて、わたしたちはしんとしていた。

「右の手を開いて、自分の胸の左のお乳のあたりを触つてごらん下さい。なにかドキンドキンと震えているものが伝わってくるでしょう？それはね、心臓というものが働いている音なのです。心臓はね、あなたたちが元気に遊んでいるときも、ご飯を食べているときも、寝ているときも、勉強しているときも、こうして休まずにドキンドキンと音をたてて、ずうっと働いているのです。こうやって働いているのは心臓だけではなくて、お腹の奥には大切なものが沢山しまっていて、それぞれいろいろなお仕事をして、みんなが食べたご飯から、元気になるように、栄養が一杯入った血液を作っています。工場がいつも休み無く動いて

いるように、みんなの身体の中でも、（心臓さん働いて）と頼まれなくても、わたしたちが元気に生きていられるように、栄養や血液を、頭や手や足の先まで、送り出すために何時でも働いているのがこの心臓なのです。

こういうすごい身体を作ってくださいの方がいるのですよ。

さあ、今度は点字のお話をしましょう。点字は六つの点でできていることを知っていますか？皆さんはお兄さんやお姉さんたち（実際には上級生の実名を言った）が、点字を書いているのを知っていますね。点字を書く道具を触らせてもらったことがありますか？点字板と定規と点筆と、点字を書く紙を使うことも知っていますね。今日皆さんは、その道具が無くても、点字を書けるように練習するのです。今練習しておけば、道具を貸していただけるかもしれないから、貸していただけるように、点字を覚えておきましょう。」

昭和23年の春のこととて、点字板はおろか、紙さえ不足で、点字板も定規も、アルミニウムの華奢な作りのもので、すぐに定規は曲がってしまうので、ちよつとでも乱暴な男の子になど簡単に貸せるものではない

時代であった。

「さあ、みんな今度は右の膝には右の手を、左の膝には左の手を置いてごらんなさい。ここからはちよつと難しいかな？膝の上を三つの場所に分けて考えるのです。右の膝を、膝小僧、膝小僧は分かれますか？触るとくすぐつたいところですね。その膝小僧に近いところと、お腹に近いところと、その間のところと、三つに分けるのです。」

もうちよつと分かるように言いましたよ。たとえば、同じ大きさの四角い箱を膝小僧に近いところの一つ、お腹に近いところの一つ、そして、その二つの箱の間に、もう一つの箱を置くのです。

こうすると右の膝の上が三つに分けられましたね。左の膝の上も同じように、頭の中で考えてごらんなさい。さあ、これで箱が全部で幾つになりましたか？」

しつかりもののMちゃんが、「六つ」というと先生は「そうです六つですな」とうれしそうだった。

「皆さんは定規を触ったことがありますか？細長い金属の板に、小さい窓のようなものが沢山横に並んでいますね。そのひとつひとつの窓に、今皆さんが頭の中で作った六つの箱を、右の膝に三つ、左の膝に三つ置いたように、この六つの箱を一つの窓の中に置いてあると思ってください。この一つの窓のことを（ひと

マス）と言うのです。

さあ、今度は右の手を出して、親指を隠すようにげんこつを作ってごらんなさい。親指はどれか分かりますか？そう、みんな上手に握っていますね。今度は人差し指だけ、一本のばしてごらんなさい。そうそう、できましたね。左の手は左の膝の上に置いたままでいいですよ。右も、左も、膝の上を三つに分けてあることは覚えていてくださいね。

さあ、点字を書いてみましょう。右の手の人差し指で、右膝の膝小僧に近いところをちよんとつついてごらんなさい。そこが1の点です。今度は右の膝の真ん中に分けたところ、そうです、三つの箱の真ん中の箱を人差し指でつついてみましょう。これが2の点です。今度はお腹に近いところをつきます。ここが3の点です。これで1の点、2の点、3の点ができました。

次は左の膝も同じようにやってみましょう。人差し指は右の手を使います。膝小僧に近いところが4の点です。左の真ん中は5の点、左のお腹に近いところが6の点です。

皆さん、1の点はどこですか？」

わたしたちは一斉に「右膝の膝小僧に近いところ」と言った。

「よくわかりましたね」と先生はうれしそうだ。

「この1の点だけを書く、(あいうえお)の(あ)という点字になるのです。次は1の点と2の点を書いてみましょう。2の点はどこですか？」

わたしたちは「右膝の真ん中！」と声をそろえて言う。

「そう、あたりです。この1の点と2の点を、一つのマスに書くと、(あいうえお)の(い)になります。今、二つの文字を覚えましたね。二つ並べて書いてごらんさい。1の点だけのと、1と2の点を並べるとどうなりますか？」

「あ、い」とわたしたちははじけるように叫んだ。

先生は本当に満足そうだった。

「あ、い。わたしの名前はなかむら あいです。わたしの名前を皆さんは書けるようになってくださいましたね。でも、この(あい)はもつともつと大きな愛、神様の愛なのです。」

わたしはこのとき、痺れるような、なんとも言えない、表現しようもない(なにか)が、全身を走り抜けるのを感じた。

(「神様の愛?」、わたしは5歳の10月から、このキリスト教の盲学校の寮生活をはじめていた。今まで神

様とか、クリスマスとか、イエス様がお生まれになった。うれしい日だとか言われても、何とも思わなかった。子供用の讃美歌を歌っても、感動などはほど遠く、ただの言葉、意味を持たない単語が、わたしの周りで跳ね回っているだけだった。

けれども、この点字を教えてください、心臓の働き、その鼓動がなんのためであるか、具体的に、子供に分かるように、生かされているという神祕を教えてください。子供に向けて真剣にお話くださったのだ。「神様の愛はとも大きくて広いのです。」と言われたとき、間違いなくわたしは点字と神の愛とを具体的にわたしの心に受け留めることができ

た。  
本当の意味でのキリスト教入信は大人になってからであるが、その大人になって、最近の十数年、地元の小学校へ、区内の点訳ボランティアの方々と一緒に、点字についての簡単実習に行くようになった。そんなとき、生徒から、「木村さんはどうやって点字を覚えたのですか?」と聞かれることがある。その度にわたしは、この6歳の春の光景を瞬時に思い出す。あるとき、その思い出にうっかり呑み込まれ、涙ぐみそうになり慌てたことがある。

この、中村愛先生は、今年、2012年、発行70年記念を迎え、戦時中も1号も絶やさずに発行し続けている「点字毎日」の初代編集長、中村京太郎（1880〔明治13〕年3月25日生、1964〔昭和39〕年12月24日、84歳没）の奥様である。

この具体的であり、かつ象徴的でもある「点字と神の愛」について教えてくださったのは、中村愛先生だけであり、しかもこの一回だけである。

漢点字も無い当時、点字を教えていただいても、まだ「平仮名」と「片仮名」の区別もなかった。

小さな子供のことで、大人の事情は全然分からなかったが、愛先生は、常時わたしたちの学校にいらっしやるのではなく、多分京太郎先生のご用事がおありのときに、お付き添いとしてご夫妻でいらしたのだと思う。一時期はかなり頻繁にお二人で、いらして、幸運にもわたしの低学年時期と重なったのである。

わたしは愛先生のことを大好きで、京太郎先生のお声が聞こえれば、愛先生のことを探した。お着物の袂に触れているだけで幸せであった。その袂から母の匂いを感じていた。あるとき「愛先生はお母さんみたい

です」と言ったら、「どんなところがですか？」と聞かれて、「何時も着物を着ていらっしやるから」と、わたしは自分でももっと表面的だけでないことを言えればいいのに、と困ってしまった。「優しいところですよ」とだけしか言えない自分が恥ずかしかった。

わたしたちは愛先生に、他にも大切なことを教えていただいた。

たとえば、和室での丁寧なお辞儀の仕方や、洋室、あるいは外で立っているときのお辞儀の仕方や、お客様にお座布団をお出するとき、座布団を正面に置くこと、縫い目が無いところが正面の真反対なので、そこをちゃんと探して、お客様が安心して座れるように用意しなさい。お客様が座布団の上に座って、縫い目が無いところがお尻のほうになるように置きなさい。そうすればお客様は自然に座布団の正面に座れること。また、自分がお客になったとき、出された座布団にきちんと座るお作法などである。

今思い出すと、袂を他の人にお渡しするとき、相手の方に危険な刃先を向けずに、尖った方を自分の手の中に包み込むようにしてお渡しするのですよ、と言いながら、わたしの手には大きかった袂を実際に持たせて教えてくださった。どれもこれも生活の基本動作

である。

もしかしたら、先生のお優しさに直接触れていられたのは、わたしの6、7歳までの短いときだったのかもしれない。お会いできなくなった訳も当然知らないで、しばらくのあいだ上級生に「愛先生いらっしやらないのかなあ」と言つて待ち焦がれていた。

そのうち、わたしは転校し、先生にお会いできる機会はますます無くなつてしまつた。

このご夫妻に最後にお目にかかつたのは、わたしが高校1年の秋で、思いがけないところでお声をかけていただいた。子供のころから愛先生を母のように慕つていたそのままの、優しさ一杯の先生であつた。何時の日かまたお会いできるだろうか、ふと不安がよぎつて、涙が止まらなかつた。感受性の鋭い先生は「また、どこかで会えますよ、元気でいらっしやいね」と優しく背を撫でてくださった。「先生に点字と、神様の愛を教えてくださいました。ありがとうございます」といふと、「まあ、わたしが神様の愛を？」とてられていらした。このような大切な機会をいただけたことを本当に感謝している。

2012年7月22日(日)

## 東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

### 平成24年度 第2回(第60回)報告

1 日時 平成24年6月16日(土)18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者 (省略)

4 周知事項

5 次回学習会日程 平成24年7月28日(土)18時30分～

6 学習会内容

使用教材 漢点字講習用テキスト 初級編第五回

7 複合文字(3)

発音文字・漢数字とこれまでに紹介された基本文字  
によって構成される文字

ア 漢点字とは漢字の符号で表わす。

例・1と6(カ)の点で表示。「金」「川」「可」

「干」「瓦」

イ 前回の復習

(9) 「壬」 漢数符5・6の点とニ(1)

2・3の点)で表示。

(10) 「癸」 関数符5・6の点とス(1)



4・5・6の点)で表す。

\* 十千の文字のうち、「辛(ロ…2・4・5の点とマ…1・3・5・6の点)」は漢数符を使用しない。

\* 「発音文字」をパーツとして含む文字。

※ 「生<sup>●●●●</sup>」(セ…1・2・4・5・6の点とイ…1・2の点)をパーツとして含む文字一つ。

(1) 「星<sup>●●●●</sup>」日(リ下がり…2・3・6の点)と生(イ…1・2の点)で表す。字式は日/生。元は 晶/生。晶は天空に散りばめた星。

#### ウ 今回の学習

※ 「反<sup>●●●●</sup>」(ハ…1・3・6の点)と(ン…3・5・6の点)をパーツとして含む文字七つ。

(2) 「仮<sup>●●●●</sup>」人偏(ナ…1・3の点)と反(ン…3・5・6の点)で表す。字式は人偏+反。旧字は「假」で、字式は人偏+尸(しかばね冠)・二十コ/又。仮面のこと。音読みの力は漢音、ケは呉音。熟語に「仮子(かし…養子)」「仮称」「仮声(かせい…声色)」「仮説」「仮装」「仮住まい」「仮初(かりそめ)」「仮名」「男仮名(漢字)」「女仮名(ひらがな)」「仮説」。ケが付く熟語に「仮病」

「仮有(けう…(仏)仮の存在)」「仮相(けそう…(仏)仮の姿)」など。

(3) 「坂<sup>●●●●</sup>」土偏(ツ…1・3・4・5の点)と反(ン…3・5・6の点)で表す。字式は土偏+反。音読みのハンは漢音、バンは呉音。熟語に「男坂」「女坂」「登坂(とはん)」、地名や人名に多く使われる。「大坂」「赤坂」「石坂」「坂本」「いろいろは坂」「早坂」「向坂(さきさか)」などのほか、小説家に「坂口安吾」大正時代の棋士に「坂田三吉」、歌舞伎俳優に「坂田藤十郎」、平安後期の武士「坂田金時(さかたのきんとき…幼名、金太郎。源頼光の四天王の一。他の三人は、渡辺綱、碓井貞光、卜部季武)」

(4) 「阪<sup>●●●●</sup>」こざと偏(サ…1・5・6の点)と反(ン…3・5・6の点)で表す。字式はこざと偏+反。音読みのハンは漢音、バンは呉音。熟語に「阪神」「京阪(京都と大阪)」「京阪神(京都・大阪・神戸)」「下阪(大阪方面にゆくこと)」「昭和の名優に「阪東妻三郎(ばんどうつまさぶろう…ばんつま)」など。

\* 四天王雑学  
・(仏)四方を守る護法神…持国天(東方)、増長

天（南方）、広目天（西方）、多聞天（北方）。

・源義経の四天王…鎌田盛政、鎌田光政、佐藤継信、佐藤忠信。

・織田信長の四天王…柴田勝家、滝川一益、丹波長秀、明智光秀。

・徳川家康の四天王…井伊直政、本田忠勝、榊原康政、酒井忠次。

・和歌四天王…① 南北朝時代の、頓阿、慶運、淨弁、兼好。② 江戸時代の、澄月、慈延、小沢蘆庵、伴蒿蹊。

### 平成24年度 第3回（第61回）報告

1 日時 平成24年7月28日（土）18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者 （省略）

4 周知事項

次回学習会日程 平成24年8月18日（土）17時00分～

5 学習会内容

使用教材 漢点字講習用テキスト 初級編第五回

7 複合文字（3）

発音文字・漢数字とこれまでに紹介された基本文字によって構成される文字

ア 文章表現に関する考察

「文語」

① 文字で書かれた言語。もっぱら読み書きに用いられる言葉。文字言語。書き言葉。

② 特に平安時代語を基礎として発達・固定した言語体系。

「文語体」…文語で綴った文章の様式。文章体。

「口語」

① 話し言葉。音声言語。話に用いる言葉。

② 話し言葉を基準とした文体の言葉。

「口語体」…話し言葉を基として綴った文章体。

「漢文体」…漢文だけの文章体。

「言文一致」…文章の言葉づかいを話し言葉に一致させること。文章には文語を用いてきたが、明治初期に言文一致運動が起り、二葉亭四迷・山田美妙・尾崎紅葉らが話し言葉に近い文章を作品に試み、その後次第に普及、今日の口語文となる。

イ 前回の復習

\* 「発音文字」をパーツとして含む文字。

※ 「反」(ナ…1・3の点)と(ン…3・5・

6の点)をパーツとして含む文字七つ。

(2) 「人偏(ナ…1・3の点)とン(3

・5・6の点)で表す。仮面を意味する。

旧字「假」が略体化された文字。虫偏がつく文字に「蝦(えび)」がある。

(3) 「坂<sup>⋮⋮⋮</sup>」 土偏(ツ・1・3・4・5の点)と反(ン・3・5・6の点)で表す。雁垂れは崖を意味し、土が盛り上がっている所。形成文字。音読みのハンは「反」の音からきている。

(4) 「阪<sup>⋮⋮⋮</sup>」 こざと偏(サ・1・5・6の点)と反(ン・3・5・6の点)で表す。

ウ 今回の学習

(5) 「板<sup>⋮⋮⋮</sup>」 木偏(キ・1・2・6の点)と反(ン・3・5・6の点)で表す。字式は木+反。

音読みのハンは漢・呉音、バン・パンは慣用音。熟語に「揭示板」「看板」「伝言板」「椎間板」「板魚(ばんぎよ・ヒラメ)」「板挟み」「板前」「豆板醬(トウバンジャン)」「甲板(かんばん)」「回覧板」「羽子板」「組板(まないた)」、名前や地名に「板垣」「板橋」「矢板」などがある。

(6) 「飯<sup>⋮⋮⋮</sup>」 食偏(セ・1・2・4・5・6の点)と反(ン・3・5・6の点)で表す。字式は食偏+反。音読みのハンは漢音。熟語に「飯蛸(イイダコ)」「御飯」「朝飯前」「炊飯器」「早飯」「姫

飯(ひめいい・釜で炊いた飯)」「鮭飯」「炒飯(チャーハン)」「飯事(ままごと)」、名前や地名に「飯田」「飯塚」「飯岡」「飯盛山」などがある。

(7) 「返<sup>⋮⋮⋮</sup>」 しんによう(ヒ・1・2・3・6の点)と反(ン・3・5・6の点)で表す。字式は、しんによう+反。音読みのヘンは慣用音、ハンは漢音、ホンは呉音。熟語に「返答」「返還」「返歌」「返品」「恩返し」「裏返し」「見返す」「若返り」「巻き返す」「混ぜ返す」など、江戸時代の作家に「十返舎一九」がいる。

(7) 「版<sup>⋮⋮⋮</sup>」 片偏(ヘ・1・2・3・4・6の点)と反(ン・3・5・6の点)で表す。字式は片偏+反。音読みのハンは漢・呉音。元々は木の板を表わしていた。熟語に「版画」「木版」「改版」「瓦版」「決定版」「版權」「版築」「凸版」などがある。

※ ① 「版權」…福沢諭吉によるcopyrightの訳語。著作権者に属する権利として1875(明治8)年に法定化、99年の著作権法制定により法律上は廃語。

※ ② 「版築」…土壁や土壇の製造法。板で作った枠の中に土を流し込み固める。

改<sup>メテ</sup>推<sup>ヲ</sup>作<sup>サン</sup>敲<sup>ト</sup>  
 賈<sup>ニ</sup>島<sup>ニ</sup>赴<sup>キテ</sup>拳<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>京<sup>ニ</sup>  
 騎<sup>リテ</sup>驢<sup>ニ</sup>賦<sup>シ</sup>詩<sup>ヲ</sup>得<sup>タリ</sup>僧<sup>ハ</sup>推<sup>ス</sup>  
 月<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>句<sup>ヲ</sup>欲<sup>スト</sup>改<sup>メテ</sup>  
 推<sup>ヲ</sup>作<sup>サント</sup>敲<sup>ト</sup>引<sup>キテ</sup>手<sup>ヲ</sup>作<sup>スモ</sup>推<sup>ス</sup>  
 敲<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>勢<sup>ハ</sup>未<sup>ダ</sup>決<sup>セ</sup>不<sup>レ</sup>覺<sup>エ</sup>  
 衝<sup>ル</sup>大<sup>ニ</sup>尹<sup>ノ</sup>韓<sup>ガ</sup>愈<sup>ニ</sup>乃<sup>チ</sup>具<sup>サニ</sup>  
 言<sup>フ</sup>愈<sup>ク</sup>曰<sup>ク</sup>敲<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>佳<sup>シト</sup>矣<sup>一</sup>  
 遂<sup>ニ</sup>並<sup>ベテ</sup>轡<sup>ヲ</sup>論<sup>ズ</sup>詩<sup>ヲ</sup>

(『唐詩紀事』)

参考図書 渡辺精一(祥伝社)『朗読してみたい中国古典の名文』

故事成語 「推敲」

推を改めて敲と作さん

賈島拳に赴きて京に至り、驢に騎りて詩を賦し、「僧は推す月下の門」の句を得たり。推を改めて敲と作さんと欲す。手を引きて推敲の勢いを作すも、未だ決せず。覚えず大尹韓愈に衝る。乃ち具さに言う。愈曰く、「敲の字佳し」と。遂に轡を並べて詩を論ず。

科挙の試験を受けるために長安に来た賈島は、驢馬に乗りながら詩句を練っている。

月下の門は「推す」よりも「敲く」の方がいいだろうかと押したり叩いたり、実際の動作までして迷っているうち、思わず知事の韓愈にぶつかってしまった。賈島が詳しく事情を話すと、韓愈は「敲くの方がいいだろう」と答え、二人は馬を並べて詩を論じ合うのであった。



改メテ 推ヲ作サン 敲ト  
 賈島赴キテ 拳ニ至リ 京ニ、  
 騎リテ 驢ニ賦シ 詩ヲ、 得  
 タリ 「僧ハ推ス月下ノ門」之句  
 ヲ。 欲スト改メテ 推ヲ 作サ  
 ント 敲ト。 引キテ 手ヲ 作ス  
 モ 推敲之勢ヒヲ、 ズ未ダ  
 決セ。 不覚エ 衝ル大尹韓  
 愈ニ。 乃チ具サニ言フ。 愈曰  
 ク、「敲ノ字佳シト矣。」 遂ニ  
 並ベテ 轡ヲ論ズ 詩ヲ。

**賈島** 779～843年  
 中唐の詩人。

**韓愈** 768～824年  
 中唐を代表する詩人・  
 文章家・政治家。



## 追悼・河村幸男様

岡田 健嗣

この七月二十五日、河村幸男様が、急逝されました。急性心筋梗塞によって、意識を回復されることはなかったとのことでした。

河村様は私の古い友人のお一人でした。そして本会の活動開始当初から賛助会員としてご支援下さって、毎年欠かさず本誌にご芳名を掲載させていただいております。

私はこの旧友の訃報を知り、半信半疑の状態でお通夜に参列させていただきました。読経・焼香と型通り済ませて、棺の傍らに立ったとき、初めて友の死に向き合っている現実に気づかされたのでした。

御斎の席が設けられ、奥様の「お暑い中：」との労いのお言葉を頂戴した途端に、「恩人ですから」という、私自身思いもかけない言葉が口を突いて出ていたのでした。「恩人？」と、奥様は訝しまれましたが、「そうです、恩人です。」とお答えしたのでした。

帰宅して、なぜ「恩人」という言葉が飛び出したのか思いを巡らせてみました。河村様は、そのように言われることを好まれないであろうことを思ったからです。しかしやはり私にとって「恩人」のお一人であることに違いないことを、確認したのでした。

河村様と初めてお会いしたのは、四十年前のことになります。誠に古く長いお付き合いでした。今から思えばそのお付き合いから、私は二つの恩恵を得ていたのです。

一つは他でもありません。この三月十六日に逝かれた思想家・吉本隆明氏の『言語にとつて美とは何か』を読み上げて下さった方々の中のお一人だったのが、河村様でした。本誌前々号で述べた通りこのことによつて、盲学校の中で、また盲学校から社会へ出て、ますます自らの誓言に悶々としていた私に、一つの手がかりが与えられたのでした。そこから現在の本会の活動まで、一続きに繋がっていると云つても過言ではありません。

吉本氏の逝去の後、氏の本を読み返してみました。時枝誠記博士の言われる「詞」よりも「辞」が、三浦つとむ氏の言われる「客観的表現」よりも「主観的表現」が、品詞で言えば動詞よりも形容詞が、形容詞よりも副詞が、「指示表出性」に比べて「自己表出性」の割合が多い、などという文に当たると、誠に懐かしい思いがしたのでした。

こんなことを語り合えていれば：、埒もないことです。もう一つの恩恵というのは、私の最も逆境にあったころ、河村様は側で、じっと見守っていて下さったの

でした。助言を下さるわけではなく、相談に乗ろうというでもありません。しかしそのようにして下さったことが、むしろ私にとって大変よかったです。現在から見てそのころの私は、日常を見失っていました。そして時日を経るに連れて、日常を取り戻せたのでした。その時間を河村様は、私にプレゼントして下さいました、そう言えるのでしょうか。

今回の訃報は、誠に突然でした。ここ暫くは言葉を交わす機会を得ずにおりました。

痛恨であり、悔やまれてなりません。

ご冥福をお祈り申し上げます。

## 「報告と案内」

横浜並びに東京漢点字羽化の会では、定期刊行物として漢点字版を作成し、ご提供しております。

ご希望を募集しております。

① 朝日歌壇… 朝日新聞に週一回掲載される記事を、一月分まとめて漢点字訳しています。四人の選者の先生方が、投歌された短歌を十首づつ選んでおられます。

購読料… 六ヶ月分三、〇〇〇円。田園調布森の会によるDAISY版のご用意もございません。

② 朝日俳壇… 朝日新聞に週一回掲載される記事

を、一月分まとめて漢点字訳しています。四人の選者の先生方が、投句された俳句を十首づつ選んでおられます。

購読料… 六ヶ月分二、四〇〇円。田園調布森の会によるDAISY版のご用意もございません。

③ 健康記事… 朝日新聞と読売新聞に掲載されている健康記事の中から選んで、漢点字訳しております。月刊でご提供致します。

購読料… 六ヶ月分一、五〇〇円。

④ 横浜通信… 文字や言葉に関係する短めの記事を広く収集して、漢点字訳しております。隔月刊でお届けします。

購読料… 無料

⑤ 季をひろう… 朝日新聞の土曜版に、詩人の高橋陸郎氏をご執筆しておられます同名の記事を、一月分まとめて漢点字訳しております。二月分づつ隔月にお届けします。

購読料… 無料

以上の他に、本紙のDAISY版も、購読料無料でお届けしております。

また、漢点字訳のご希望もお待ち申し上げております。お気軽にご相談下さい。

《今回、都合により漢点字講習用テキストを休載します》

## 編集後記

▼大災害が起こると、そのあとみんなが親切になり、弱者をいたわるようになるが、それが一過性であって、十日もすると元の木阿弥になつてしまうというのを発見したと、岡田さんは言っておられます。不思議な現象ですね。これが日本人の特性なのでしょう。岡田さんはこのような心のあり様を、「こころの間口」と呼びました。日本人は日常には「こころの間口」を、必要以上に開こうとしないが、欧米人は、「こころの間口」を常に広く保とうと努力しているようにみえると言います。そうかも知れませんが、われわれも「こころの間口」を広く保ちたいものだと思います▼「災害は忘れた頃にやってくる」と古くから言われていますが、最近の大災害の発生状況を見ると、忘れる間もなくやってくるようです。日本列島の南側の大きな断層帯が3つ連動して大地震を引き起こす危険性についても、かなり高い確率で起こることが予測されています。少々の備えをしていたところでどうにもならないでしょうが、そんな災害が現実にならないことをただただ祈るのみです。

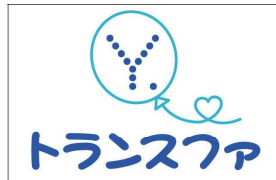
木下 和久

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は10月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。